

本論は、平安時代の女房の実態をふまえつつ、物語の表現を読み解くことによって、『源氏物語』の物語世界のありようを明らかにしようとしたものである。

序章および三部七章からなり、序章では『源氏物語』における女房研究の歴史をたどりながら、本論の目的及び構成を述べて研究史的位置付けをはかった。第一部「Ⅰ 女房の照らし出すもの」（第一章から第三章）では、女主人の周辺に見える女房に関する描写に着目し、女房の造形によって浮かび上がる女主人の人物像を明らかにしながら、存在そのものが物語の展開に関わる女房のあり方を論じた。第二部「Ⅱ 動く女童」（第四章および第五章）では、女房の中でも女童たちの姿に着目し、女童独自の役割を検討したうえで、女童が存在するだけでなく動きを見せることによって構築されてくる物語世界を明らかにした。第三部「Ⅲ 女官の位相」（第六章および第七章）では、職掌を持つて宮中に仕える女官の中から、東宮宣旨と典侍を取り上げ、歴史的資料を用いて女官の実態を明らかにしたうえで、周囲の人物の立場や関係性をふまえながら、公的な役割を持つ女官が物語に登場することの意義を検討した。以下、序章および各章の概要を示す。

序章 『源氏物語』における女房研究の現在と展望

戦前の『源氏物語』研究においては、『源氏物語』の成立過程に関する仮説が提示され、いわゆる成立論によって物語世界を理解しようとする試みがなされていた。戦後、それらの研究が引き継がれる中で、物語を「読み聞かせる女房」の存在に着目されるようになり、「語り」との関わりの中で女房の存在に目が向けられるようになった。一方、同時期には、歴史社会学的方法による研究が盛んになり、文学作品の作者たる女性たちが置かれた社会状況や内面が作品に与えた影響が検討されることで、『源氏物語』の物語世界の成立と当時の社会の実態とが深く関わることが論じられていく。そうした中で、貴族社会における女房の位置付けがなされ、『源氏物語』に登場する女房についても、物語の成立・発展に不可欠な存在であることが示されたのである。

平安時代の女房については、歴史学の方面からも研究が進められ、『令義解』や『延喜式』などの歴史資料を用いた調査に加え、『源氏物語』や『枕草子』、女房の日記などの

文学作品をはじめとする幅広い資料に基づいて、令制下における女房の実態が明らかにされてきた。また、一九六〇年代には紫式部の本名に関する論争が起こり、宮仕えをする女性が官職を持つ「女官」と持たない「女房」とに大別され、位階の有無や職掌による差異が詳細に検討された。女房の実態をとらえるためには「女官」も含めて考えることが不可欠であり、官職を持ち公的な役職に就く女性たちについては個別に検証が進められている。

一方、『源氏物語』研究においては、女房は主要な登場人物と同様に、ひとりの作中人物ととらえられてきた。作中人物としての女房論が展開される中で、とくに区別されて論じられてきたのがいわゆる「召人」と乳母・乳母子であり、他の女房とは異なる独自の立場と役割を持つ存在とされる。それ以外の女房については、主要な登場人物を取り巻く端役として取り上げられ、従来とは異なる位置付けを行うことによって、物語あるいは登場人物についての新たな読みの可能性が示されている。近年、『源氏物語』における女房の研究は細分化・多様化が進んでおり、歴史資料を用いて平安時代の女房の実態や制度の解明が進められると同時に、物語に登場する女房に関する記述からそれぞれの人物像が明らかにされ、物語を進展させ構成する重要な要素としての位置付けがはかられている。

しかしながら、『源氏物語』における女房に関する研究は未だ十分とはいえない。従来女房研究で多く取り上げられてきたのは、呼び名を持ち、女房集団の中心となる女房たちであるが、『源氏物語』の中には呼び名を持たない女房や女童など、わずかに点描されるだけであっても、数多くの女房の存在が見える。本論では、そうした見過ごされていた女房や女童に関する記述にも着目し、女房がどのように物語世界を構築していくかを考察することによって、新たな物語世界をとらえることを目指した。

I 女房の照らし出すもの

第一部では、まず密通に関わる女房たちを取り上げ、その女房たちの存在なくして物語は展開し得なかったことを論じた。密通が実現するためには、女房が外界と主人とを取り次ぐ役割を担っていることが前提となるが、女房の思惑と主人の意向とは必ずしも一致せず、女房の言動のために主人の立場そのものが危うくなる場合もあった。さらに、女房が主人の歌の代作を行う場合に注目し、主人の意向を汲み取って動く女房の役割が、物語が展開するうえでどのような意義を有しているかを検討した。第一部の考察によって、女房が主人の存在や物語展開と不可分であることが浮き彫りになった。

第一章 女三宮の十二人の女房―「若菜下」巻の密通をよびおこすもの―

第一章では、「若菜下」巻の賀茂祭の御禊の前日に語られる「齋院に奉りたまふ女房十二人」に着目し、十二人の女房を奉ることで見えてくる女三の宮の立場を検討した。

柏木と女三の宮の密通が起ったとき、女三の官方では、齋院に奉る「十二人」の女房をはじめ、「ことに上臈にはあらぬ若き人童べ」や「物見むと思ひまうくる」者までもがそれぞれ御禊の準備に追われていたといい、女三の宮の周辺が「人しげからぬをり」になっていたことが語られる。その間隙を縫って女三の宮の乳母子、小侍従が柏木を手引きするのであるが、「十二人」の上臈女房の不在が密通の機会をつくり出していたのであり、女三の宮と柏木との密通について検討するうえで、「齋院に奉りたまふ女房十二人」の存在に着目することは不可欠である。

女三の宮の女房については、「鈴虫」巻の持仏開眼供養の際に「御乳母」や「古人」をはじめ一部の若い女房など「十余人ばかり」が共に尼になったことが語られることから、「十余人ばかり」の乳母や古くから仕える女房が組織の中樞を担っていたとみることができる。また、女三の宮の乳母たちは、朱雀院が女三の宮の婿選びに苦慮していた折に相談を持ちかけられるなど信頼の厚い女房たちであったことが推察され、その選定には朱雀院の意向も反映されていたのではなからうか。乳母たちは日頃から女三の宮の側近くに仕えていたものの、密通が起ったときには側に乳母の姿がなく、齋院に奉られた「十二人」の女房の中には乳母も含まれていたと考えざるを得ない。

『源氏物語』における齋院に関する記述を精査すると、当該の齋院とは女三の宮の姉妹にあたる朱雀院の皇女であることが指摘でき、だからこそ、女三の宮は御禊にあたって上臈女房を派遣しなければならなかったといえる。「十二人」の女房の担った役割としては、出車に乗って御禊の行列に参加することが想定されるが、そうした支援を女三の宮が担うこととなったのは、女三の宮が朱雀院や今上帝によって二品に叙せられ、最も品位を高められた皇女であったことに起因すると考えられる。女三の宮は、父や兄によって与えられた格の高さに加え、世の人々からも重く扱われる女宮であり、天皇家の権威を世に示す役割を果たすべき立場にあった。このときの社会的な立場をふまえれば、「十二人」の女房を奉ることは避けられないことであるといえるが、その不在は柏木にとってこのうえない密通の機会をつくり出している。「齋院に奉りたまふ女房十二人」という叙述は、このうえない皇女として厚遇される女三の宮のあり方とともに、その厚遇こそが女三の宮の周囲に間隙を生じさせ、密通を呼びおこすという物語世界の様相を示すものであった。

第二章 王命婦論―「賢木」巻における「いとほしがりきこゆ」の対象を起点として―

第二章では、「賢木」巻の光源氏と藤壺との密通の後に、藤壺の女房である王命婦が「いとほしがりきこゆ」という心情を抱くことを始発に、王命婦と藤壺との関係性を検討した。

王命婦は藤壺中宮に仕える女房であったが、光源氏からの度重なる要求によって両者の密通を手引きした。光源氏と藤壺中宮との密通の後、光源氏は後朝の文すら送らずにわざとらしく引き籠もり、藤壺もまた密通の夜のことを引きずって気分が優れないままでいた。そのような両者の間に立たされた王命婦は「いとほしがりきこゆ」という心情を抱く。

命婦は律令で位階等については定められているものの、具体的な職掌はなく、それぞれが特有の存在意義を持って伺候する女房であった。たとえば、女主人の使いとして男性貴族との間を取り持ち、遊びの場にも姿を見せるなど、外部との関わりを密に持ち、主家の繁栄の一端を担う存在であった。一方で、家の内部において御産や子女の養育などを担う命婦もあり、女房集団の中核を担う存在として主人と親密な関係を築いていたのである。『源氏物語』においても複数の命婦の姿が見えるが、桐壺更衣の死後に桐壺帝の使いを務める靱負命婦の描写からも主人からの信頼の厚さがうかがえ、光源氏と末摘花との間を取り持つ大輔命婦は常陸宮家の事情に精通した人物であった。

そうした中で、王命婦に関する記述を見ると、藤壺中宮と王命婦との繋がりの深さが浮かび上がる。たとえば、「若紫」巻でいち早く藤壺の懐妊に気付いたのが王命婦であったとされるが、光源氏を手引きした王命婦は数少ない冷泉帝誕生の真相を知る存在となる。さらに、出家後も藤壺の代わりに東宮の女房として出仕を続け、御匣殿別当のあとに直廬を賜っている。王命婦は、藤壺中宮と最も親密な関係を築いた女房であり、藤壺と秘事を共有しつつ冷泉帝の後見的な立場であり続けたのである。

藤壺は、冷泉帝の即位と御代の安寧を願い、母として中宮として政治的なあり方へと転換する。しかしながら、光源氏への想いを捨てていくことはできず、物語は光源氏に惹かれる藤壺の心情を王命婦のものとして語る。王命婦は中宮としての藤壺ではなく、光源氏に心を寄せる一人の女性としての藤壺の心情を代弁するのである。王命婦は常に藤壺と不即不離な関係にあり、物語に描かれることのなかったもうひとつの藤壺の姿を体現する存在であったのである。

第三章 中納言の君の代作―「常夏」巻における近江の君への返歌をめぐる―

第三章では、「常夏」巻において、弘徽殿女御と近江の君という異母姉妹の間で交わされる歌のやり取りの場において、女御方が女房による代作・代筆という手段を選んだことに着目した。『源氏物語』『常夏』巻、近江の君が弘徽殿女御に出仕することとなり、女御に文を認めたが、その内容は地名ばかりを詠み込んだ歌をはじめ、あまりに滑稽なものであった。文を受け取った弘徽殿女御方は、女御自身が返事をするのではなく、女房の中納言の君に返歌を任せたのである。中納言の君は近江の君からの文の内容をふまえて、同じように地名を詠み込んだ歌を詠み、筆跡を女御に似せて「御文めきて」書いて送った。

近江の君は内大臣が夢語りをきっかけに探し出した娘として物語に登場するが、貴族の家において異質な存在として扱われる。また、従来「笑い」との関わりが指摘され、鄙で育った笑われる女君として存在することで、宮廷社会やそこで生きる人々のあり方を照らし出していると論じられてきたのである。そうした近江の君が送ってきた歌の詠みぶりは、歌の前後が続かない支離滅裂なものであるとされ、呪的ともいえる力をも含め持つものであるととらえられてきた。そのような歌に対して、弘徽殿女御方は女房による代作・代筆という手法によって返歌することを選び取ったのである。

『源氏物語』に見える歌の代作という行為や代作歌をどのように定義するかはさまざま論じられてきた。新編日本古典文学全集によれば『源氏物語』には一八首の代作歌があるとされるが、女房による代作歌は八首あり、女性の要請よって代作がなされたのは七例、そのうち六例が男女の間で交わされる歌の贈答に関係している。近江の君と弘徽殿女御の例だけが、女性同士の贈答で女房が代作をするものであり、『源氏物語』においては異例な状況である。一方で、歌の贈答をする相手との親密さを表すためには、いわゆる代筆にあたる「宣旨書き」ではなく直筆による返事が求められており、文を代筆することは意図的に距離を取るための方法であったともいえる。代作や代筆がなされた文は、どのようにして書かれたものであるかが判然としない場合もあるが、相手との直接的な接触なくして主人の意向を伝えるための手段として、平安朝の社会性に適した方法であった。

近江の君から送られてきた文に対して中納言の君が代作・代筆したのは、弘徽殿女御自身が返歌をすることでをこなす女君、近江の君の笑いや呪力に取り込まれることを避けるものであったと考えられる。さらに、中納言の君は「御文めきて」弘徽殿女御の筆跡に似せて書き、主人を立てつつうまく状況を打開しようとする。しかし、近江の君がそれに気付くことはなく、近江の君の存在によって、女房の役割をも問い直されているのであった。

II 動く女童

第二部では、第一部で考察した女房よりさらに個別性が認めがたい女童を対象とした。主人の意向を巧みに汲み取って対処する女房とは異なり、女童自身がどのような考えによって行動するかはほとんど語られない。しかし、女童は周囲の人々に姿を見られる場所に出て行くことが多く、主人の意向によってある程度自由に扱われる女房でもあることから、むしろその存在に注目することで物語展開や状況描写がより明らかになるものと考ええる。

第四章 犬君のゆくえ―『源氏物語』における女童をめぐる―

第四章では、紫の上に仕える女童である犬君を取り上げ、「若紫」「紅葉賀」巻のわずか二箇所が登場するだけの犬君の存在と不在から紫の上の置かれた立場を検討した。

犬君は「若紫」巻において紫の上が伏籠の中に入れていた雀の子を逃がし、少納言の乳母から「心なし」「心づきなし」と評され、「紅葉賀」巻においては、紫の上の雛遊びの道具を壊し、光源氏から「心なき人」と評されるように、紫の上の行動を阻害し、批判される者として描き出されている。この二箇所に点描されるにすぎない犬君については、同一人物であることを疑問視する見解もあるが、行動に一貫性があることや周囲の人々から同じように「心なし」と評されていることをふまえれば、両場面の犬君は同一人物であるといえよう。また、紫の上とは極めて親密な関係にあることがうかがえ、紫の上の無邪気なふるまいをとどめるかのような行動を取ることの意義は改めて考え直す必要がある。

『源氏物語』をはじめとする平安朝の文学作品には、数多くの女童の姿が描かれ、その年齢や出身階級、職掌についてはさまざま論じられてきた。中でも、女童は明らかに大人の女房とは区別され、特異な性質を持つものとされてきたのである。特に大きな違いとしては、まず、女童は人目に付くところに出て行く存在であるということが挙げられ、視覚の対象となる女童の装束を華麗に整え、人選にも気を配ることで、主人たる女君の権力・経済力や趣味・教養といったすべてを象徴し、主家の権勢の強さを示すあり方が見える。また、女童は主人の意向によって出仕先を移動させられていることから、大人の女房とは異なる流動性の高さが指摘できる。それは、女童が人ではなく家に仕える存在であったことを示しており、家に帰属する性質を持つといえる。中には乳母や女房の娘、姉妹など大人の女房との繋がりを持ち、家に代々仕える女房の系譜に連なる女童の存在も見え、犬君の出自にも同様の系譜が想定される。

紫の上が北山で養育されていた頃には、紫の上の周囲には「遊びがたき」となる「きよ

げなる童など」が見え、犬君もその中の一人であったと考えられる。犬君は「遊びがたき」として紫の上が大切にしていた雀の子を逃がし、雛遊びの道具を壊すなどの行動を取るが、それは紫の上の成長を促す者、北山の尼君や少納言の乳母の意向を体現するものとも解することができるのである。犬君は、代々按察大納言家に仕えてきた女房の系譜にある者で、たんなる乳母子や女童にとどまらない存在であると考えられる。そのような犬君は、紫の上が光源氏に引き取られて二条院に入った後には姿を見せない。二条院においては、紫の上と女童は「遊びがたき」などではなく、明確な主従関係を持つ。犬君の姿が見えなくなることは、紫の上が光源氏の庇護のもとに入ったことを示すと同時に、按察大納言家の守護の及ばないところに据え直されたことを意味しているのであった。

第五章 「今参り」考―匂宮と浮舟との邂逅をめぐって―

第五章では、「東屋」巻の匂宮と浮舟の邂逅場面において、二条院で匂宮が目にした「例ならぬ童」が邂逅の契機となったことに加え、当該場面で浮舟に対して「今参り」という語が三度重ねられていることに着目した。

『源氏物語』「東屋」巻、匂宮が二条院に帰邸したとき、中の君はあいにく洗髪中であり、暇を持て余した匂宮が邸の中を歩き回る中で、浮舟と邂逅することとなる。匂宮は、「例ならぬ童」の存在に目を止め、「今参りたるか」などと思つて中を覗くと女性の袖口が見え、「今参りの口惜しからぬなめり」と思つて中に入り、浮舟を見出す。このとき、浮舟は、将来を案じた母中将の君の依頼で中の君のもとに託されていたのであるが、匂宮がそれを知る由もなく、騒ぎに気付いた女房の右近が浮舟を敬う態度を取ることから、「いとおしなべての今参りにはあらざめり」と考えて興味を示すのであった。

『源氏物語』において「今参り」という語は、近江の君が召し使う樋洗童以外は全て浮舟の周辺で用いられており、「今参り」に囲まれる浮舟の特性が見える。中将の君は「今参り」の者たちに一貫して警戒心を抱いているが、他の文学作品においても「今参り」の者たちは好奇心を含んだ視線を向けられ、特に女房集団においては「今参り」の者を排除しかねない厳しさを含むものであり、いわば内なる部外者として扱われていたのである。また、「今参り」と形容されるのは女房や女童であり、主人のもとに参入し、召し使われることが前提となっていた。『源氏物語』や『栄花物語』においては、女君の転居や婚姻の際に「今参り」の女房が新たに集められる例が多く見え、人選は姫君の近親者や縁者が行われ、その選定には細心の注意が払われていたのである。一方で、中の君のもとには「去

年の冬、人の参らせたる童」が仕えているとされるように、新たな女房や女童の参入は日常的に行われていたものでもあった。

ただし、浮舟は中将の君によつて中の君のもとに託されてはいたものの、女房ではない。匂宮と浮舟との邂逅のきっかけとなったのは「例ならぬ童」を見かけたことであつたが、この「例ならぬ童」は二条院に入ってから中の君によつて浮舟に与えられた女童であろう。そして、この女童は浮舟が宇治に移った後も仕え続け、再び匂宮が浮舟を見出す場面で登場する。匂宮は宇治の邸で「童のをかしげなる」者の姿を目にし、「これが顔、まづかの灯影に見たまひしそれなり」とかつて二条院で目にした「例ならぬ童」と同じ女童が仕えていたことから、邸の中の女君が浮舟だと気付くのである。匂宮と浮舟との邂逅場面において二度も同じ新参の女童がその契機となること、さらには浮舟自身までもが「今参り」の女房として認識されたところから両者の物語が始まることはきわめて重要であろう。

のちに匂宮は、女房の侍従が付けていた裳をとつて浮舟に付けさせ、手水の世話をさせている。これは明らかに浮舟を女房と見ていることを示しており、一貫して匂宮にとって浮舟は女房階級の女君でしかないのであつた。「東屋」巻の邂逅場面において、匂宮が浮舟を「今参り」と認識したときから、両者の物語が男女の物語には発展し得ないことがすでに規定されていたのである。

Ⅲ 女官の位相

第三部では、平安時代の女房の実態の影響を強く受ける女官を考察の対象とした。まずは実在した女房に関する歴史的資料や記録を調査・整理したうえで物語の記述と比較することで、物語に登場する人物と歴史上の女官との間には差異があることを指摘した。そうした視点は、他の作中人物と比較する場合でも有益なものであり、『源氏物語』に描かれる女房の背景にある平安時代の女房の実体に目を向けることで、物語独自の女房のあり方が照らし出されてくることが明らかになった。

第六章 「春宮の宣旨なる典侍」論―「若菜上」巻の御湯殿の儀をめぐる―

第六章では、「若菜上」巻において東宮と明石女御との間に誕生した御子の御湯殿の儀に「春宮の宣旨なる典侍」が奉仕していることに着目した。

『源氏物語』「若菜上」巻、「三月の十余日ほど」に明石女御や若宮を出産し、明石の女御の母、明石の君の居所である六条院の西北の町において、御湯殿の儀が催される。紫

の上は「白き御装束」を身に纏って「人の親めきて」若宮をしつかりと抱き、「まことの祖母」である明石の君は「御湯殿のあつかひ」に奉仕するのであった。そのとき、儀式には「春宮の宣旨なる典侍」が参上しており、この典侍は「内々のこともほの知りたる」人物であるという。当該の儀式においては、「春宮の宣旨なる典侍」が湯殿役、明石の君が迎湯役を務めており、両者が儀式において果たした役割は大きい。当該場面の御湯殿の儀に関しては、明石の一族の血筋と御子との関わりや生誕儀礼という視点から検討がなされてきたが、東宮の御子誕生に際した御湯殿の儀において「春宮の宣旨なる典侍」という女房の存在が語られることの意義は改めて問い直す必要がある。

史上の御湯殿の儀に奉仕した湯殿役や迎湯役について、成明親王（村上天皇）、憲平親王（冷泉天皇）、敦成親王（後一条天皇）、敦良親王（後朱雀天皇）の御湯殿の儀の記述を確認すると、成明親王の場合には湯殿役が宮中から派遣されているものの、敦成親王や敦良親王の場合には湯殿役と迎湯役が共に彰子の女房であり、道長の意向が強く反映されている。ただし、父方の意向によって女房が派遣された例や、幾度も御湯殿の儀に奉仕し、経験や力量が評価された女房の姿も見える。一方で、典侍が湯殿役や迎湯役を務める例はあるものの、「若菜上」巻の当該場面に見えるような東宮宣旨が奉仕した例はない。

ただし、「春宮の宣旨なる典侍」は現実的な人物設定であったといえる。東宮宣旨は安殿親王（平城天皇）の東宮宣旨を務めた藤原薬子を初見とし、東宮女房の最上位にある女官であった。敦仁親王（醍醐天皇）から尊仁親王（後三条天皇）に仕えた九人の東宮宣旨の資料からは宣旨と乳母・乳付や典侍との関わりの深さが見え、宣旨を務めた後に典侍といった高位に至る宣旨や、典侍と東宮宣旨を兼任した可能性のある宣旨の記述も確認される。東宮宣旨は東宮女房の最上位にあり、御子との繋がりが強く重用された女房であった。

そのような「春宮の宣旨なる典侍」が御湯殿の儀に奉仕したことは、御子が明石の一族の血脈に連なる人物であることとも関係している。明石の一族にとって、明石の女御が「后がね」となることやその御子が帝となることは悲願であったが、周囲の人々からは、御子が受領階級出身の一族の血筋を持つことは瑕となるべき事柄と見られていた。そのため、御子を明石一族ではなく東宮の後継であることを強調し、正統性を対外的に示す必要があった。そこで登場したのが典侍を兼ねた東宮女房という、東宮女房の中でも最上位にある「春宮の宣旨なる典侍」であった。「春宮の宣旨なる典侍」は、御子が将来東宮となり帝となることを保証するための存在として機能しているのである。

第七章 藤典侍論―「夕霧」巻における雲居雁との贈答をめぐる―

第七章では、「夕霧」巻の藤典侍と雲居雁との歌の贈答場面を取り上げ、藤典侍の持つ「典侍」という職掌に着目した。

『源氏物語』「夕霧」巻において、正妻である雲居雁は夕霧が落葉の宮に心を奪われて関係を持つようになったことに嫉妬し、方違えという口実のもと里帰りをしてしまう。そのようなとき、惟光の娘で夕霧と関係を持つ藤典侍が雲居雁に歌を送るのである。藤典侍は雲居雁の心痛を思い「数ならば身に知られまし世のうさを人のためにも濡らす袖かな」という歌を送り、それを受け取った雲居雁は「なまけやけし」と思いながらも、藤典侍も平静ではいられないのだろうと考え、「人の世のうきをあはれと見しかども身にかへんとは思はざりしを」と返歌をする。藤典侍の歌は雲居雁への心からの同情を詠んだものとも、雲居雁と肩を並べて夕霧の夫人の座を争おうとする意識が見えるものともされる。一方で、雲居雁が「なまけやけし」という感情を抱くことは、藤典侍の同情を素直に受入れきれない心情を示すものでもあった。歌の贈答から両者の関係性を見ると、注目したいのは藤典侍が「典侍」という公的な役職を持つ女官であるということである。

藤典侍が夕霧に見初められたことを知ったとき、父の惟光は夕霧が娘のことを一人前に扱ってくれるのならば、宮仕えに出すよりも夕霧に奉りたいと語り、「明石の入道の例にやならまし」という。惟光は受領の娘でありながらも光源氏に愛された明石の君に自分の娘を重ねている。後に娘の明石の姫君が紫の上、藤典侍の娘である六の君が落葉の宮の養女として育てられたことや、女三の宮や落葉の宮といった皇女の存在によって正妻の立場が脅かされていることをふまえると、明石の君の物語と藤典侍の物語は対になるものとして位置付けられよう。しかしながら、藤典侍は明石の君とは違いあくまでも女房であった。

典侍は尚侍に次ぐ地位にある女官であったが、尚侍が天皇の後妃の前段階として任じられる職となったことで、実質的には最上位の女官として位置付けられ、貴族の娘が望む理想的な出仕のあり方ととらえることができる。そうしたことをふまえると、藤典侍は高位の女官として社会的に安定した立場にある女性であったといえる。そうした安定性は夕霧の愛情に頼るしかない雲居雁とは全く異なるものであり、藤典侍の存在によって雲居雁が置かれた不安定な立場が照らし出されていくのである。